

第14回 『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』  
～人材の育て方、活かし方―「リーダーシップ」を考える！～

【第1回】

テーマ: 今こそ「リーダーシップ」とは何かを考えてみよう！

～「体育的リーダーシップ」から「知育的リーダーシップ」への変換～

講師・司会: 平尾剛氏 (ラグビー元日本代表 神戸親和女子大学教授)

講師: 玉木正之氏 (スポーツ文化評論家)

日時: 2020年9月26日(土) 19:00～20:30

会場: 神戸国際会館セミナーハウス



スポーツ界の幅広いジャンルから知見豊かな方々をお招きし、その指導論やリーダー論から人材育成のポイントを学ぶ『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。第14回となる今年のテーマは「リーダーシップ」。判断力や決断力、コミュニケーション能力など、組織を率いるリーダーに求められる能力

はどう伸ばせばいいか、どう人材を育成すればいいかを議論します。

これまでには講師陣、参加者の皆さま共に会場へ足を運んでいただくスタイルで開催しておりました『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』ですが、コロナ禍という状況を鑑み、密を回避すべく今回よりオンラインでの開催とさせていただきます。コロナパンデミックで世の中が厳しい状況にありますが、これを機に、SCIXでも新たなスタイルに転換し、より多くの方々と繋がっていければと考えております。

その記念すべきSCIX初のオンライン講座、初回講師は『SCIX インテリジェンス講座』には欠かせないスポーツ文化評論家・玉木正之氏をお迎えいたしました。そして、講師と司会進行の二役を務めていただいたのは、こちらもお馴染み、ラグビー元日本代表、神戸親和女子大学教授の平尾剛氏。ZOOMウェビナーを使用した今回のオンライン講座。平尾氏には、例年会場として使用している神戸国際会館セミナーハウスの一室にお越しいただき、玉木氏はご自宅からオンラインでのご出演という形となりました。

まずは、平尾氏による挨拶でSCIX初のオンライン講座がスタート！『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』初のオンライン開催について、さらに今期のテーマについて平尾氏から説明が

あり、平尾氏による紹介コメントに合わせて玉木氏が ZOOM ウェビナーの会場へ入室。ご自宅の書斎と思しき玉木氏の背後には、壁一面に本がズラリ。この映像を見ただけでも玉木氏の知識の深さ、引き出しの多さがうかがい知れます。画面中央に映り込んでいる T シャツについて尋ねる平尾氏。右は SCIX 理事長・故・平尾誠二氏の直筆サイン入り T シャツ、左は SCIX イベントでの



贈呈 T シャツと玉木氏が紹介。記念すべき初めての SCIX オンライン講座の無事を見守り、見届けてもらおうという平尾誠二氏に対する畏敬の念が伝わります。

講座冒頭のテーマは、コロナウイルスが世界的に感染拡大するなか、世界中のスポーツがストップしてしまった状況について。

「紀元前、古代ギリシャのオリンピックで始まったとされる古代オリンピック。その時代から、戦争と疫病を克服するために 4 年に 1 回行われたのがオリンピック」と、スポーツの起源、歴史に深い造詣を持つスポーツ文化評論家の玉木氏ならではのコメントに、「なるほど、そうだったのかあ」と思った視聴者（受講者）も多かったのではないのでしょうか。さらにこう続けます。「コロナでオリンピックは延期になったが、コロナに打ち勝つというのが楽しみ。コロナを乗り越えた時に生まれるスポーツに期待したい。何か新しいものが生まれると思う。スポーツだけでなくオーケストラやオペラ、ライブハウスの方がより密。どう克服するか楽しみ。これをきっかけにもっと前に推し進めることはできないかを、今、僕のテーマにしている」。これに平尾氏も「文化があるから僕たちの生活は豊かになる。スポーツもオペラも文化としてどう生き残っていくのか見たい」と同調。

ここで玉木氏が昨今のオリンピックについて問題を提起します。「今、最も注目されているのがオリパラ（オリンピック・パラリンピック）。今のオリンピックはスポンサー料や契約料の問題があって中止できないようになっている。オリンピック憲章にも決行するか中止しかないので政治家を引っ張り出して延期にした。これほどまでにスポンサーに縛られているオリンピックをここでなんとか直してほしい。これを機会に思い切って変えようよ！と開催国の日本から言えないのは辛い。このままでは絶対に続けられないと思っている」。

平尾氏も来年の東京オリンピック開催については懸念があると言います。「たくさんの選手が日本に入ってくる。今は海外の選手が入国する際は 2 週間隔離が設けられているが、それが免除されることになっている。コロナ感染を防ぐために、その措置は適切なのか？無理矢理（オリンピックを）やろうとしている。商業主義と批判されるオリンピックは見直すべき。スポーツの価

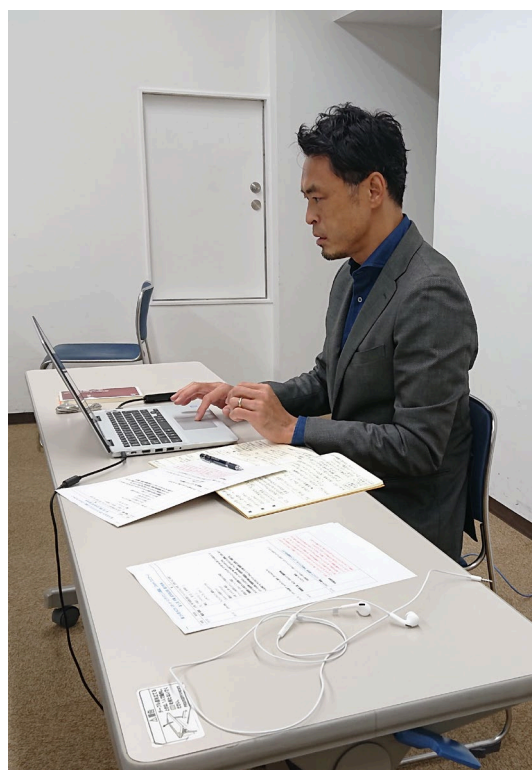
値がどんどん減じられている」と元スポーツ選手、ラグビー元日本代表選手として、オリンピックの在り方、そして来年の開催について切なる思いを打ち明けました。

さらに玉木氏は、商業主義へと変遷していったオリンピックの歴史とIOCの実態について言及します。「1984年のロス五輪で商業主義が始まったと言われているが、それは半分正しく、半分間違っている。それまではアマチュアリズムでお金を集めてはいけないという風潮があったが、ロスの前のモスクワ、モントリオールの方がたくさんのお金を使っている。選手村は全て大学の施設を使うなど工夫したのがロス五輪。このお陰でアメリカの慈善団体はすごく潤った。ところが、その後IOCがそれにとって代わった。発展途上国にそのお金を回しているとIOCは言っているが実際はどうか？本当は誰が儲けたのか？？」。来年の東京オリンピック・パラリンピックは果たして開催されるのか？開催されるなら、どういった形で開催されるのか？コロナパンデミックは防げるのか？商業主義のオリンピックはこの先どうなっていくのか？…問題山積のオリンピックに話しは尽きませんが、ここで話題は会のメインテーマとなる「今こそリーダーシップとは何かを考えよう」へ移行します。

今般のコロナ禍で、スポーツ界も“活動自粛”が余儀なくされるなか、驚いたのがバレーボール強豪校の「闇部活」。またこれに続いて、部活指導者の言葉によるパワハラ問題（暴言指導）もいくつか取り上げられました。昭和の時代に善しとされ、体罰も辞さない熱血指導、勝利至上主義が、特に育成年代の「部活」で蔓延しています。体育会的指導、体育会的リーダーシップについてご意見をお聞かせいただきました。

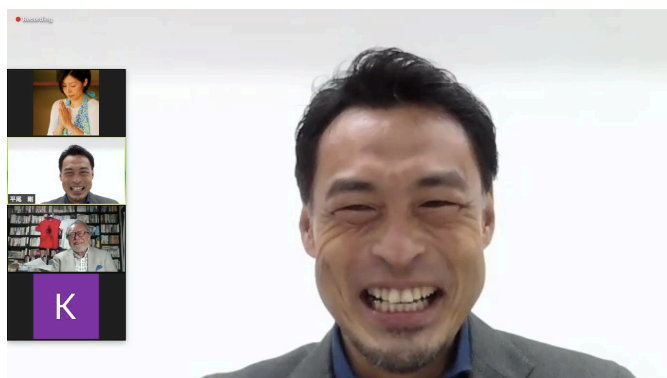
まずは玉木氏が、上意下達の“体育会”というものが一体どうして生まれたのか？さらに、コーチの語源、由来などを説明。「本来コーチとは、4輪の馬車が乗客を目的地に運ぶこと。それに対して先生は命令する。命令することに慣れた先生は指導しない。言葉で表現できるのが指導者、コーチ」と、田嶋幸三氏の著書「『言語技術が日本のサッカーを変える（光文社新書）』を紹介しながら、コーチの条件、あるべき姿を語ります。

この話を受けて平尾氏が、バレーボール元日本代表・益子直美さんと大山加奈さんの対談記事について言及しました。益子さんは『怒ってはいけないバレーボール大会』を開催。その経緯は、自身が「つべこべ言わずにやれ。お前はでかいだけ」という暴言で指導された過去があったからで、そう、で、「暴力は一瞬、でも言葉はずっと突き刺さっていて今でも夢に見る」と対談のなかで益子さ



んが吐露していたそうです。スポーツ現場の暴言について「言葉の感覚が指導者の中できちっと身につけていない」と平尾氏が指導者の言語化能力の低さを強調しました。

さらに玉木氏は、その歴史をこう紐解きます。「言葉の中でも間違っただけと正しい言葉がある。正しい言葉とは知識に裏付けられている。言葉できちんと説明できないものだから、言われた通りにやれ！ということになる。”サッカー”という言葉は”association football”に由来するが、その説明ができない歴史を知らない指導者も多い。知育、徳育、体育を集めたのがスポーツ。日本は体育だけになってしまった。体育の先生が言葉できちんと説明する必要がなくなってしまった。これは明治時代の終わり頃からの軍隊の影響が大きい」と。



ここで、言葉をとっても大事にしていた人物として SCIX 理事長、故・平尾誠二氏の名前が挙がります。生前親交が深かったお二人ならではのエピソードを聞かせてくださいました。「平尾さんがいつも言っていたのが、この言葉。練習とはいい癖をつけるための

もの。これは上手い表現。癖がついたらあとは自然にそれができるようになると。それと、ラグビーのポジション名も変えた方がいいね～と言っていたのが面白かった」と玉木氏。平尾氏も「チームワークって言葉が嫌い。チームプレーやろ。だから自分の本でもチームプレーって使ってるねん」と互いの印象に残っているコメントを披露。「必ず自分の納得する答えを出す。中途半端な返事はしない。言葉を大事にしている証拠ですね」「平尾さんの言葉に対する執着はすごい。辞書も信用しない。自分にじっくりくる言葉しか信用しない」と両氏揃って平尾氏の言葉にこだわる姿を讃えました。

玉木氏の申し出によりしばしトイレ休憩を挟んだ後、玉木氏が元西鉄ライオンズの大下弘さんの指導を例に、スポーツの在り方、コーチの在り方について語ります。「ジュニアチームを指導している時に、相手チームからちゃんとルール通りにやってくれと言われて、大下さんが『子供たちがあんなに楽しそうにやってるのに、どうしてルール通りにやらないといけない?』』と言っていたのが印象的。さらに、ミスをしたら、ミスをした子どもに色紙を送ってあげていた。それって楽しいですね。スポーツは本来楽しいもの」。

平尾氏もこう続けます。「その時代にそんな指導者が居たというのが嬉しい。ミスに対する考え方はいち早く変えていかないと。スポーツ以外の社会に出た時とかの物への向き合い方にも通じる。ミスはダメだけど、出てしまうものだからミスに対する寛容さは必要。ミスしたら色紙を送るというのは大下さんなりのアプローチ。とても素敵なこと」。

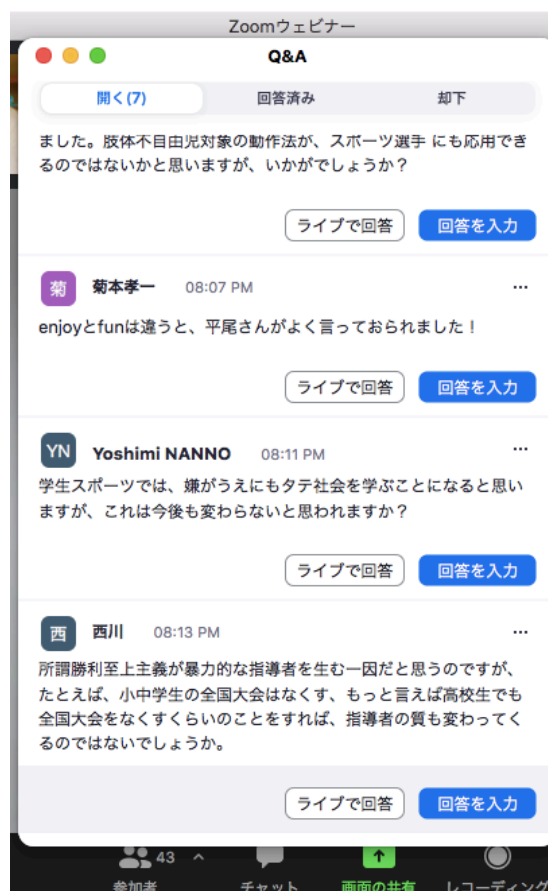


ここで、“楽しむ”という言葉にスポットを当てる平尾氏。「楽しむ」という言葉に誤解がある。楽しむというのは楽をするということではない。苦しいこともあつての楽しむということ。今の状況を楽しむということ」。これに対し、玉木氏がコメント。「平尾誠二氏は早い段階から“楽しむ”ということを言い始め、それは勝つために必死になるのがどれほど楽しいのか？ということも含めて“楽しむ”と言っていたんだと思う」。

平尾誠二氏がいかに優れたアスリートであり、指導者であったかということが、図らずも浮き彫りになった今回の講座。早いもので終了時刻が近づきます。

恒例の質疑応答は、ZOOMのQ&A機能を利用して参加者から寄せられた質問に対して両者がコメントする形で行われました。投稿された質問は下記。

Q.「陸上ファンで自分も市民ランナーとしてマラソンを走っています。練習場所で一緒になった高校陸上部の練習を見ていると、選手たちと一緒に走りながら、あるいはコース上のいろいろなポイントに立って指導している指導者と、椅子にどっかり座りタバコをふかしながら怒鳴っているだけの指導者に二分されているように思えます。言葉にも表れると思いますが、指導者としての基本的な姿勢も大事なように感じますが、一方で強豪校でもそういった古いタイプの先生が指導していることがあります。なぜ、こういった古いタイプの先生でも成果が出せるのでしょうか？不思議です。ちなみに前者の指導者は身体の使い方、足運び、ペースの作り方などテクニカルなしっかりとしたアドバイスをしていますが、後者は『気持ちで走れ〜』『粘れ〜』といった精神論が多いです（苦笑）」



Q.「システムエンジニアとして働いていますが、IT特有の知識や技術を説明することの難しさを痛感しています」

Q. 肢体不自由児の特別支援学校で動作訓練をしていました。その時によく体幹を整えるとか、軸を作るとか、重心を移動するとか言われてました。肢体不自由児対象の動作法が、スポーツ選手にも応用できるのではないかと思います。いかがでしょうか？

Q. enjoy と fun は違うと、平尾誠二さんがよく言っておられました！

Q. 学生スポーツでは、嫌がおうでも縦社会を学ぶことになると思いますが、これは今後も変わらないと思われませんか？

Q. 所謂勝利至上主義が暴力的な社会を生む一因だと思うのですが、たとえば、小中学生の全国大会をなくす、もっと言えば高校生でも全国大会をなくすくらいのことをすれば、指導者の質も変わってくるのではないのでしょうか？

以上の質問に対するお二人の詳細な回答については割愛しますが、「勝利至上主義という言葉がよくない。勝利目的主義にすべき」などという玉木氏の興味深い持論などもうかがえました。ご質問くださった皆さま、どうもありがとうございました。

最後に本日の感想として、「第一回目から登場しているが ZOOM は今回が初めて。背景の平尾誠二に助けられた。少しでも皆さんの参考になれば嬉しい」と玉木氏。そしてファイシリテーターを務めてくださった平尾氏は「玉木さんのお話はいい刺激。自分自身勉強になった」とコメント。

平尾氏から視聴者（受講者）へのお礼と次回講座のご案内をお知らせし、初回オンライン講座は無事終了致しました。今回ご参加くださった皆さまに改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。初めてのオンライン開催ということで不手際、不慣れな点もございましたが、今後、回を重ねるごとに改善していく所存ですので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。これまでの対面式講座からオンライン開催へと移行したことにより、これまでご参加いただくことが難しかった遠方にお住いの多くの方々にもご参加いただけましたこと、大変嬉しく思っております。

次回は、10月17日（土）19:00より、今回と同じく平尾剛氏にファイシリテーターをお願いし、講師には関西学院大学アメリカンフットボール部前監督・鳥内秀晃氏をお迎えして開催させていただきます。たくさんの方のご参加お待ちしております。

（レポート 中野里美）

スポーツ振興くじ助成事業

